



八王子の昔話を語り継ぐ「語り部」の皆様

未来の「語り部」たちのために
とんとんむかし出版記念おはなし会

このたび、「高尾山どんとん昔語り部の会（吉田美江会長）」が、八王子に残されている昔話を収録した、『どんとんむかし話』を出版され、七月十八日に「どんむかし出版記念おはなし会」が開催されました。この語り部の会は、民俗学の研究をしていた児童文学者の、故・菊地正

菊地先生がこの会を設立されました。

立されたのは、八王子には数多くの昔話や伝説が残されていますが、そうしたお話を語り継ぐ、「語り部」がいなくなつてしまふことを危惧されていますからということです。

語り部の会には、現在では男女約二十名が所属しております、八王子市内の

保育園や小学校などで
昔話を語っております。

昔話の語りを聞いた人達から、「語つて頂いた昔話が書かれている本があ

るのでしょうか?」とい
う声を聞くことが増える
ようになつたそうです。

本来であれば、昔話は
口伝により語り継がれて
いくものであります、が、



とんとんむかし
—語ろう！八王子のむかし話—
編集 高尾山とんとんむかし語り部
搖籃社 1,200円（税別）

書籍紹介

聞く機会が減少している事も事實です。本を通じて「語り」に触れられるよう、また、昔話を通して親子の触れ合いを深めてほしいとの思いから、この本が出版されることとなりました。収録したお話は菊地先生が採集した千話以上の昔話の中から、五十七話が選ばれました。

出版記念おはなし会の当日には、八王子労政会館に約八十人の招待者が集まり、語り部の人達により、「子授け稻荷」や「天狗笑い」等の昔話が語られました。吉田会長にお話を聞きますと、この本を編集するに当たり、「八王子の昔話は「武州弁」で伝承されてきたことから、その方言の言葉遣いで書くことに」と、新しく「語り部」になろうとする人が一人でも生まれて頂ければ、と話されておりました。

川口川は中流域で大きくなり、蛇行し、代官淵と呼ばれる深い淵をつくる。東京がまだ、江戸と呼ばれていたころの話だ。商家の若旦那である章介は妙な噂を聞く。淵に立ち入ろうとするとき、見知らぬ女が現れて引き留めようと。この地で大久保長安の一族が処刑されたところから、その靈ではないかと人びとは噂をあつていた。

だが幽霊など見たことがない章介は、皆が怖がっていることにじれて、ある日、「俺が正体を突き止めてやる」と啖面をきつてしまふ。

——その日は、明け方から雨が降りつづく薄暗い日だった。「ちえつけられた」みんなの前で強気な態度をとつたものの

ゆうれい探しに正直、腰が引けてきた。そのとき脊後から袖そでを引くものがいる。

「章介さん、ここに来てはいけません」。『でた……』。ぞつとして章介がおそるおそるぶりかえり、年ころは三十あまり。切れ長の目の女がじつと見つめているではないか。

「何者だ。なんで俺の名を知つてんだ」。氣丈にいい放つたつもりだが、語尾がふるえる。

だが女は、章介の問いかけには応えず、「ここへ来てはだめ」とくりかえすだけだった。しだいに雨足が強くなり、淵の水かさも増してきたが、章介は女の正体を突き止めなければ帰れない。しばしの間答の末、女が「じつは、かわいいぼうやを

木つ端を押しやつた。章介は夢中でその木つ端につかまり、いのちからがら浅瀬にたどりついた。女の姿を探したが、うねる川面が見えるだけでどこにも女の姿はない。「まるで、俺を助けたみたいじゃないか」章介はためいきをついた。

町に戻った章介はこの出来事を和尚に話す。自分の名前を知っているのはなぜかと。

「お前さん、心当たりはないのかい。ぼうやのこと言つたんだろ」「そういえば、少し前に川の水があふれたとき、親子のきつねを助けたことがありました。でも、子ギツネは水をたくさん飲んでいて死んだんです」和尚さんは、合点がいったようだつた。

「女はそのキツネじや

「よ。子をなくす悲しみは自分でたくさんだと、淵に人が近づかないようにしていたにちがいないと和尚は話してくれた。

「和尚さま、いつしょに淵まで行ってくださいませんか。キツネの子どもを供養してやりたいんですけど」。「うむ、わしもそうす」。

(さし絵・小出 茂)

思つていたところじや和尚と章介が代官淵に行くと、草葉のかげで一匹のキツネが死んでいた。「俺を助けたあとに……」

そののち、章介は親子ギツネの供養塔を建ててねんごろに供養したといふことだ。

